六所神社

六所神社は、1300 年代後半から松平郷を支配した松平家の祖先である松平親氏（伝 1394 年没）にその歴史を遡ることができる神道の神社である。伝説によると、親氏は六所山の山頂に神社を設立し、祀られている神々が谷間に住む家族を見守るようにしたという。しかし、山自体は遠い昔から神の宿る場所として崇められていたと考えられ、神社がいつ作られたかは不明である。六所神社の上宮は現在も山の上にあり、下宮は北西の谷間に位置する。

六所神社は、松平家ゆかりの他の社寺と同様に、松平家の多くの分家などの信仰を集めた。松平親氏の子孫である徳川家康（1543-1616）を中心とした徳川幕府が日本を支配していた江戸時代（1603-1867）には、将軍家から大きな社領を拝領していた。下宮の建物には江戸時代の建築様式が見られる。堂々とした拝殿と、その後ろに薄い木の板で屋根を覆った本殿がある。また、道路を挟んだ向かい側には、江戸時代末期から 1900 年代初期にかけてこの地域で盛んだった農村歌舞伎などの民族芸能を上演するための茅葺きの舞台がある。